

Title	青森県弘前市方言における文末詞「ネ」「ジャ」「ヤ」
Author(s)	阿部, 貴人
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2000, 2, p. 1-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23169
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

青森県弘前市方言における文末詞「ネ」「ジャ」「ヤ」

阿部貴人

【キーワード】聞き手の情報の有無、認識時点、聞き手の存在の必要性

1. はじめに

弘前市方言の文末詞「ネ」「ジャ」「ヤ」は次のように使用される。

(1)服に何かついているネ/ジャ/ヤ¹⁾

これまで文末詞「ネ」「ジャ」「ヤ」については、以下のような指摘・説明がされている。

「ネ」

共通語の意味合いの「ネ」の用法とは違う使われ方をしている。それは、どちらかという共通語での「ヨ」の使い方と似ている。つまり、「～ネ」と相手にはたらきかけるというよりも、「～ヨ」と自分の確信的意志を表明しているのである。(中略)津軽地域で使われている「ネ」は、情報は、話し手のなわばりのみに属し、話し手の主張を表現することが多い。(小形1999:105)

「ジャ」

話し手の意志を相手へ確信を持って投げかけるときに使われる。

(同:107)

「ヤ」

情報が話し手のなわばりのみに属し、聞き手に対して話し手が情報を持ちかけるときに使われる。

(同:106)

3形式ともに「情報」が「話し手のみに属」する形式であるが、その違いが明確ではなく、此島(1968)や藤原(1982)においてもその使用を指摘するにとどまっている。

弘前市方言における文末詞を体系的に捉える足がかりとして、本稿では話し手と聞き手の認識にギャップがあることを示す3形式を対照・記述する。

分析データは筆者の内省²⁾であり、方言的な要素のみを片仮名表記する。

2. 共起関係

2.1. 他の形式との共起関係

まず、3形式の文内での位置について確認しておく。

ベ/ンタ + ネ/ジャ/ヤ + ナ

「ネ」「ジャ」「ヤ」は、「ベ/ンタ」(言表事態めあてのモダリティ形式)などと「ナ」(伝達のムードを表す形式)の間に位置する。また、丁寧体とは共起しない。

なお、「ネ」「ジャ」は上昇調の文末イントネーションとは共起できず、「ヤ」は下降調(自然下降)の文末イントネーションとも共起できる。上昇調イントネーションと共起した「ヤ」は共通語「よ↑」に相当し、「知らせ・告知・よびかけ」(小山1997:107)などの機能を持つ。上昇調イントネーションの表記がない限り、以下の「ヤ」は下降調(自然下降)イントネーションである。

2.2. 文タイプなど

井上(1995:165)で述べられているように、共通語「よ」は平叙文・勧誘文・命令文(依頼文・禁止文を含む)・疑問文のいずれとも共起可能な汎用終助詞である。これに対し、弘前市方言の「ネ」は勧誘文・命令文(依頼文・禁止文を含む)・疑問文とは共起できず、平叙文専用の形式である。

また、「ジャ」は平叙文・命令文(依頼文・禁止文を含む)と共起可能であり、「ヤ」は疑問文以外は共起可能である。

- (2)私が行くネ/ジャ/ヤ
- (3)いっしょに行こう#ネ/*ジャ/ヤ <勧誘>
- (4)早く行け*ネ/ジャ/ヤ <命令(命令形)>
- (5)早く起きて*ネ/ジャ/ヤ <命令(依頼形)>
- (6)そこに入るな*ネ/ジャ/ヤ <命令(禁止形)>
- (7)いつ行ったのか*ネ/*ジャ/*ヤ <疑問>

上述のイントネーションとの関係と、各形式の文タイプとの共起関係を複合させてまとめると、次のようになる。

表1 文タイプ+イントネーションと共起関係(列は共通語「よ」の文タイプ+イントネーション)

	命令↑	命令↓	平叙↑	平叙↓	勧誘(↓のみ)	疑問文
ヤ↑	○	×	○	×	×	×
ヤ↓	×	○	×	○	○	×
ジャ	×	○	×	○	×	×
ネ	×	×	×	○	×	×

以下では、対象を平叙文に限って記述することにする。

3. 3形式の基本的な意味

3.1. 「ネ」「ジャ」「ヤ」の内在的意味

井上(1995)における富山県砺波方言の文末詞「ヤ/マ」「チャ/ワ」の記述では、「当該の情報」は「既定事項」か「その場で想起された話し手の個人的見解」か、「当該の話し手の意向は、聞き手の意向や現実の状況と矛盾するかないか」という観点から、それらの文末詞が発話に含まれる「命題内容」に言及するという機能を有するとしている。

弘前市方言における「ネ」「ジャ」「ヤ」も、命題内容に言及するものであり、以下のような意味を持つ。

(8)Pネ：

聞き手が発話時において全く認識していない情報について、「話し手としてはPと認識している」という話し手の個人的な判断を示す。

(9)Pジャ：

話し手が新規に認識した(あるいは発話時に再認識した)Pを導入し、聞き手の認識との調整を図る。

(10)Pヤ：

聞き手に何らかの情報がある(話し手の情報>聞き手の情報)という状況において、聞き手の認識との調整を図る。

「ネ」「ジャ」「ヤ」に共通する意味は、話し手と聞き手の認識にギャップが存在するという点である。そして、結論から言えば、これら3形式の違いは次の3つの観点から記述できる。

(11)【聞き手の情報の有無】の差：「ネ」と「ヤ」の違い

【認識時】の差：「ネ」と「ジャ」の違い

【聞き手の有無】の差：「ヤ」と「ジャ」の違い

以下では、これら3つの差について具体的に検証していく。

3.1.1. 聞き手の情報の有無による差(「ネ」と「ヤ」の違い)

(12)A：[Bが結婚したという噂を聞いて] 結婚したんだって？

B：そうだ#ネ/ヤ

(13)A：どうして引越したんだ？

B：結婚したんだネ/#ヤ

(14)A：[名字が変わっているのに気がついて] 結婚したんだね。

B：そうだ#ネ/ヤ

「聞き手の情報の有無」の差とは、聞き手に情報があるか否かということであり、質問に対する応答の場合に顕著に現われる。(12)は「話し手の情報>聞き手の情報」(Aに情報あり)という状況である。(13)はAが質問に対する答えについて情報を持っていない場合であり、聞き手に未知の情報(話し手にとっては既に認識済みの情報)を提示している。また、(12)(14)のように、Aが持つ情報には話し手が判断した確信の度合は関与していない。つまり、「ネ」「ヤ」の記述において問題になるのは、聞き手の情報の有無ということになる。

「ネ」は「聞き手が発話時において全く認識していない」情報を示すため、新規の話題を導入する場で用いられるのに対し、「ジャ」「ヤ」は使用不可能である。

(15)昨日、映画を見に行ったんだネ/#ジャ/??ヤ そしたらね…

談話資料では、(13)のような聞き手が情報を持っていない質問に対する応答よりも、この新規のトピックを導入するという用法が多く見られる。

ところで、井上論文における「チャ」「ワ」は、「のだ」に付加された場合に、知識表明は「チャ」が用いられ、「ワ」は推量判断的断定の解釈のみであるとされている。「ネ」はこの点に関与せず、「それが／実は」「きっと／たぶん」のどちらも共起できる。

(16) [Bが目をこすっているのを見て]

A: どうしたんですか?

B1: それが／実は 目にゴミが入ったんだネ =井上論文(46) 【知識表明】

B2: きっと／たぶん 目にゴミが入ったんだネ =井上論文(47) 【推量判断的断定】

「ネ」は「きっと／たぶん」などと共起できることから、命題内容が既定事項として扱われているのではなく、「話し手としてはPと認識しているという話し手の個人的な判断」であることがわかる。

また、(16)では、話し手(B)が提出する情報を聞き手(A)が全く持っていないため「ヤ」は使用できない。「ヤ」の使用可能な「話し手の情報>聞き手の情報」の場合をみると、(17)のように「ヤ」も知識表明か推量判断的断定かには関わっていない。

(17) [Bが目をこすっているのを見て]

A: 目にゴミがはいったんじゃないですか?

B1: うん、それが／実は そうなんだヤ

B2: うん、きっと／たぶん そうなんだヤ

3.1.2. 認識時の差(「ネ」と「ジャ」の違い)

(18)(19)は、「ジャ」は使用不可能である。

(18)A: 昨日映画見に行ったんだって?

B: そうだ#ジャ

(19)A: 昨日どこに行ったんだ?

B: 映画を見に行ったんだ#ジャ

(18)(19)では「映画を見に行ったこと」は発話の場で新規に認識されたのではなく、話し手にとっては認識済みの情報である。対照的に「ネ」は「話し手としてはPと認識している」ことが前提になっており、新規に認識された場合は用いられない。

(20) [探し物をしている] あっ、ここにあった#ネ/ジャ

(21) あれ、誰かきたらしい#ネ/ジャ

ところで、「ヤ」は、「話し手が提示する情報について、聞き手が何らかの情報を持っている」ということが、話し手にとって前提とされていればよく、その情報が発話の場で新規に認識されたかどうかには関与していない。(22)は新規に認識された場合であり、(23)は認識済みの場合である。

(22)A: [ペンを探しながら] どこにあるのかなあ

B: [ペンをみつけて] あっ、ここにあったヤ

(23) [ペンを探している聞き手に] ペンなら隣の部屋にあったヤ

3.1.3. 聞き手の有無の差(「ジャ」「ヤ」の違い)

「ネ」の「聞き手が発話時において全く認識していない(あるいは忘れている)」情報と、「ヤ」の「話し手の情報>聞き手の情報(聞き手に何らかの情報がある)」という状況の違いが、話し手と聞き手の情報量の差であったように、両形式には聞き手の情報の有無が関与している。したがって、「ネ」「ヤ」は、共に聞き手の存在が不可欠である。

これに対し、「ジャ」はその情報を認識する時点のみが問題であり、必ずしも聞き手を必要としない。したがって、「ジャ」と「ヤ」は聞き手の存在が必要かどうかということで対立する。

(24) [一人で探し物をしていて] あっ、ここにあったジャ/#ヤ

(24') [二人で探し物をしていて] あっ、ここにあったジャ/ヤ

【聞き手の情報の有無】 【認識時】 【聞き手の有無】と各形式との関係をまとめると、以下のようになる。

表2 各形式と【聞き手の情報の有無】 【認識時】 【聞き手の有無】の関係

	聞き手の情報	認識	聞き手の存在
ネ	なし	認識済み	—
ジャ	—	新規	必要なし
ヤ	あり	—	必要

— : 関与しない、あるいはその形式を記述するにあたって余剰的であることを示す

4. 基本的意味に反する用法

これまで見てきた基本的な意味にあえて反し、その発話に何らかの意味合いを持たせるという語用論的な用法がある。それは、聞き手の情報の有無に違反する場合である。

3.1.1. でみたように、「ネ」は聞き手に全く情報がないこと、「ヤ」は何らかの情報を持っていることが前提であった。この「ネ」「ヤ」は、どちらも聞き手の情報の有無に違反することである特定の意味合いを生む。

(25)A : 君、結婚するんだって？

B1 : そうだよ↑/ヤ

B2 : そうだよ↓/ヤ

B3 : そうだネ

(25)は聞き手に不確定ながらも「結婚する」という情報があり、「ヤ」が使用される。これに対し、B3は「それがどうした?」「なにか問題があるか?」といった意味合いを含み、実際、反発的な発話が続くことが予想される。共通語の場合でも、B2のように下降調(自然下降)の文末イントネーションを伴った場合には、「ネ」と同様に反発的な発話となることもある。小山(1997: 107)では、共通語「よ」と文末イントネーションの関係を考察し、以下のようにまとめている。

「よ」＋昇調：確信度・意向の同方向における話し手と聞き手との認識の差
→「知らせ・告知・よびかけ」など

「よ」＋降調：認識の食い違い →「訂正・反駁」など

「よ」＋降昇調：認識の差に対する聞き手の反応の問いかけ →「強い疑念」など

このように、共通語「よ」自体は(25)における反発的な意味合いには関与せず、文末イントネーションとの共起によって発話の意味を形成している。これに対して当該方言では形式がその機能を担っているのである。

また、(26)は聞き手に情報が無い場合である。

(26)A：どうして引越したの？

B：結婚したんだヤ

(26)で「ヤ」が使用された場合には「結婚したことを忘れたのか」といった意味合いを持つ。つまり、話し手にとっては、「結婚した」という情報を聞き手も持っているはずだと認識しているのである。これは、「聞き手に情報がある」という基本的な意味を派生させた用法と言えるだろう。

5. まとめ

本稿では、青森県弘前市方言における文末詞「ネ」「ジャ」「ヤ」を、【情報の有無】【認識時】【聞き手の有無】という観点によって対照・記述した。それらをまとめると、次のようになる。

(27)各形式は命題内容に言及する形式であり、

Pネ：聞き手が発話時において全く認識していない情報について、「話し手としてはPと認識している」という話し手の個人的な判断を示す。

Pジャ：話し手が新規に認識した(あるいは発話時に再認識した)Pを導入し、聞き手の認識との調整を図る。

Pヤ：「話し手の情報>聞き手の情報」(聞き手に何らかの情報がある)という状況において、聞き手の認識との調整を図る。

という意味を持つ。

(28)また、3形式は、

【聞き手の情報の有無】：「ネ」と「ヤ」の対立

【認識時】の違い：「ネ」と「ジャ」の対立

【聞き手の有無】：「ジャ」と「ヤ」の対立

という関係にある。

共通語「よ」は、これら3つの観点には関与せず、発話に言及する汎用的な文末詞である。当該方言では【聞き手の情報の有無】【認識時】【聞き手の有無】という違いを命題内容に言及する形式が担っているのである。

以上の考察では取りあげなかったが、伝達のムードを表す「ナ」との共起(ネナ/ジャナ/ヤナ)という問題が残る。また、汎用的な共通語「よ」が用いられる疑問詞疑問文などは、当該方言では他の文末詞(「バ」)がそれを担っており、いずれも方言文末詞を体系的に記述するうえでの課題である。

【注】

1) 2.1.で述べるように、「ヤ」は上昇調の文末イントネーションと共起し、共通語「よ」に相当する。(1)で使用される「ヤ」はこの上昇調イントネーションを伴ったものであり、後に考察するように、下降調イントネーションと共起した「ヤ」は、この場合は用いられない。

2) 筆者の出身地・外住歴は、以下のとおりである。

～18歳 青森県弘前市 18～22歳 東京都 22～現在(25歳) 大阪府

3) 井上論文で検証されているように、共通語「よ」は特定の命題内容を含まない疑問詞疑問文にも共起し得る。

どうしたんだよ↓。何があったんだよ↓。 =井上論文(69)

どうしたんだ*ネ/*ジャ/*ヤ 何があったんだ*ネ/*ジャ/*ヤ

このことから、「よ」は、

「(何らかの意味で)文脈の構築が順調ではない」という状況に対処して、文脈の構築を順調に進行させようとする。 (井上1995:180)

という話し手の心的態度を表示するとし、「よ」の汎用性に言及している。

なお、弘前市に隣接する五所川原市出身者から、「ヤ」は疑問文とも共起可能であるという情報を得た。地域差については、課題としたい。

【引用文献】

井上優(1995)「方言終助詞の意味分析—富山県砺波方言の「ヤ/マ」「チャ/ワ」—」

『国立国語研究所報告110 研究報告書16』

小形浩子(1999)「津軽と南部の「語り」における文末詞研究」兵庫教育大学言語表現学会『言語表現研究』第15号

此島正年(1968)『青森県の方言』津軽書房

小山哲春(1997)「文末詞と文末イントネーション」『文法と音声』くろしお出版

藤原与一(1982)『昭和日本語方言の総合的研究 第三巻 方言文末詞<文末助詞>の研究(上)』春陽堂書店

あべ たかひと(大阪大学大学院)

taka8630@let.osaka-u.ac.jp